

福祉のひろば

今、話題になっている買い物難民の問題を生活保障の視点から、研究会の報告と現地取材をおりませ発信します。

1
2011

特集 生活保障の視点から買い物難民問題を考える

素顔の商店街・巣鴨地藏通り

福井県民生活協同組合の移動店舗「ハーツ便」

都市部における買い物弱者の実態について

企業との連携による過疎地における高齢者の買い物支援

私たちの暮らしを支える身近なお店

ボストン生活者としての買い物体験から

カナダ・バンクーバーからのレポート

生活保障としての買い物支援

田中 彰

谷口純子

増田利治

菊本隆博

山田千尋

吉田穂波

大河内南穂子

新井康友



編集 総合社会福祉研究所

ひろばトーク

社会保障研究家

からかま

唐鎌

なおよし


直義さん

「貧困」「失業」「社会」の理解をめぐる混沌

おばあちゃんの原宿

—東京都豊島区—

集鴨地蔵通商

ぶらりお参り  ゆった

東京都豊島区豊島町三丁目

「おばあちゃんの原宿」こと、東京巣鴨の巣鴨地蔵通り商店街。毎月4のつく日はお縁日で、狭い通りにさらに露店が出て下町情緒あふれるなか、身動きできないほど多くの人で賑わい、行き交う人が「肩袖触れ合う商店街」。とげぬき地蔵への庶民信仰に支えられた歴史のまち、安くて便利、お年寄りやみんなに優しい。それは「かつてはどこにでもあった商店街」の姿です。



「お地蔵さんへのお参りがメイン」と話す方は多いけれど、やっぱりお参りのあとは買い物、そしていつものお店でのおしゃべり！取材中、立ち寄った金物屋さん。店の奥、レジ前にはご主人目当てか、常連さんの指定席が並んでいました。「みんないろいろ話して帰るから、うちはそこに椅子置いとくんだよ」とご主人。



地元の人も商店街を大事にしています。通りの横筋に一步入ると、誰が置いたのか椅子を並べた「くつろぎコーナー」が自然とできていました。お年寄りたちが屋台のものを食べながら休憩したり、おしゃべりに花を咲かせたり、人混みのなか、そこだけがゆったりとした時間が流れています。「毎週来る」「4の日は欠かさず来る」等々、リピーターが多いのもこの商店街の特徴です。



東京都老後保障推進協会の人たちの署名行動。お縁日の日に合わせて商店街の入り口付近に立ちます。地域の高齢者の買い物事情を反映してか、「巣鴨に集うお年寄り、都内はもちろん首都圏各地から来られていることが署名から見てとれる」と話されます。これ以上、高齢者が生きにくい社会にしないために、今日も奮闘が続きます。

【ひろばトーク】

「貧困」「失業」「社会」の理解をめぐる混沌 唐鎌 直義 6

●特集● 生活保障の視点から買い物難民問題を考える

素顔の商店街・巣鴨地藏通り	田中 彰	9
福井県民生活協同組合の移動店舗「ハーツ便」	谷口 純子	12
都市部における買い物弱者の実態について	増田 利治	17
企業との連携による過疎地における高齢者の買い物支援	菊本 隆博	21
私たちの暮らしを支える身近なお店	山田 千尋	25
ボストン生活者としての買い物体験から	吉田 穂波	27
カナダ・バンクーバーからのレポート	大河内南穂子	31
【特集まとめ】生活保障としての買い物支援	新井 康友	35

●連載●

フォーラム 民間福祉労働運動の歴史を語らねば	前田 鉄雄	40
【リレー連載・第3回】デンマークの女性福祉事情		
移民女性へのDV被害者支援と対策	山本八重子	42
すみれ児童館子どもの家—素敵な放課後—		
低学年の子どもたち	澤井 勇人	46
相談室の窓から		
自分気づき(その2)	青木 道忠	48
社会科学の窓から見える 社会福祉ひろば		
「大砲かバターか」……永遠で緊急のテーマ	鍋谷 州春	50
わらじ医者 早川一光の「よろず診療所日誌」		
私の地域医療(その21)	早川 一光	52
よりあって おりあって——宅老所よりあい物語——		
春に祝う	下村恵美子	54
育つ風景 学生たちの未来	清水 玲子	56
落合健二のニュース私考		
松下政経塾のお坊ちゃんたちのTPP	落合 健二	58
映画案内 『Ricky リッキー』	吉村 英夫	60
現代の貧困を訪ねて		
生活保護と無縁社会	生田 武志	62
海外社会保障事情		
韓国のヘルパーさんと出会って	藤原 るか	64
私の研究ノート		
三池炭鉱三川鉱炭じん爆発事故被災者世帯の 生活問題にみる社会福祉の課題	田中 智子	66
ホームレスから日本を見れば	ありむら潜	68
花咲け!男やもめ	川口モトコ	69
バリアフリーな社会をめざして		
金融機関のバリアをなくす運動	山城 完治	70

●表紙の写真●

トルコ中部のカップドキア。気球の中から撮りました。(下野祇園)



●カッター●

川本 浩・田上明子

今月の本棚 37/みんなのポスト 38/ことばで遊ぼう! 71/
福祉の動き 72

●グラビア● おばあちゃんの原因(東京都豊島区)

「貧困」「失業」「社会」の
理解をめぐる混沌総合社会福祉研究所理事・
社会保障研究家からかま
唐鎌なおよし
直義さん

私の研究は、端的に言うところ「貧困研究」ですが、いわゆる「ホームレス」研究に象徴される近年の研究動向とは大きく異なり、「働いている一般勤労国民の貧困」を研究しています。つまり「不安定就業階層の研究」がテーマです。また「一般勤労国民が高齢期を迎えた時の貧困」も研究しています。

「ホームレス」研究に従事している人々の多くは、「野宿」というその特異な生活様式から、「ホームレス」の人々を「一般勤労者」とは明確に異なる「アンダークラス」と捉える傾向が強いようですが、私は「ホームレス」の人々も「不安定就業階層」に含まれる（つまり労働者階級の一構成要員である）と考えています。

これは非常に大きな相違で、貧困を広く労働者階級一般の問題と見るか、それともごく一部の人々に限定された狭い特殊な問題と見るか、という違いに行き着きます。

私には、いくら専門分化した現代だからとは言え、どれほど多く見積もっても五万人前後にしかならない「ホームレス」の人々の研究で、日本の「貧困研究」が完成されるとは思えないのです。それは研究する人自身の「貧困観の貧困」（つまり「哲学の貧困」）を図らずも露呈してしまっているか、そうでなければ「貧困」の理解を、研究のレベルではなく社会通念のレベルで捉えることに歩み寄り過ぎてしまっているかのどちらかではないでしょうか。

貧困を労働者階級一般の問題と捉える姿勢は、必然的に労働者の「労働と生活」を研究することにつながります。特に失業の研究は貧困研究に不可欠であると考えています。ただし、貧困研究同様、失業研究にも二つの潮流があり、失業を「社会的原因」から捉える潮流と「個人的原因」から捉える潮流に分かれます。正規雇用の足がかり



からかま なおよし

長野大学、大正大学、専修大学で講師、助教授、教授を歴任。また、総合社会福祉研究所理事、労働運動総合研究所常任理事、全日本年金者組合政策委員、群馬県館林市男女共同参画審議会会長なども務める。編著書に『どうする！あなたの社会保障』（旬報社）、『社会保障でしあわせになるために―「社会保障基本法」への挑戦』（かもがわ出版）、『福死国家に立ち向かう―社会保障再生の道を問う』（新日本出版社）など。

にさえ役立たないような「アリバイ型職業訓練」をいくら失業者に提供してみても、ほとんど効果は上がっていないようですから、個人の雇用確保を支援する「就労自立支援」政策は、それ自身ミスマッチの体系であることに気づくべきではないでしょうか。

就活中の大学生の四割近くが就職浪人（未就業失業）を強いられ、非正規雇用で働かざるを得ない労働者が雇用労働者の三割を超え、正規雇用に就いても月に一二万円という低賃金で生活しなければならぬ福祉従事者が多い日本社会の現状を変えることのほうが先決です。二〇〇六年度現在の日本のGDPは実質で五六二兆円、国民可処分所得は名目で四一三兆円です。あのバブル経済の絶頂期を優に超えているのです。

私たちは今、「貧困」概念の多様化がもたらした理解の混沌のなかにいます。「貧困」「失業」「社会」――どの言葉を取り上げても、どういう意味で使われているのか、精査してからでないとい理理解できません。「社会」という概念を「世間」と同義と考える研究者さえいるのです。それはまるで「この世に社会というものには存在しません」と言い放ったマーガレット・サッチャーの哲学（新自由主義）そのものではありませんか。かつて「非貨幣的ニーズ」論が全盛の頃、「貧困」を語る研究者自体が非常に少なかった時代は、「貧困」概念の多様化は起こりませんでした。貧困研究の現状はまるで天にまで届く「バベルの塔」を建設しようとして神の怒りを買ひ、相互に意思疎通できなくなったバビロニア人のように見えます。そこを何とか噛み分けられるようにしたい。それが私のこれからの研究課題の一つになりそうです。



特

集

生活保障の視点から 買い物難民問題を考える

イギリスでは、1990年頃から都市中心部の中小食料品店やショッピングセンターの倒産・撤退が相次ぎ、都市部で生鮮食品を購入できない人が増えていることが話題になりました。都市中心部に居住している貧困層は、品揃えの悪い小売店やファーストフード店に依存した食生活を過ごさざるを得ず、その結果、長期的には健康被害を被りました。これらの状況は「フードデザート（食の砂漠）」として問題になりました。

日本では杉田聡氏の著書『買い物難民—もうひとつの高齢者問題—』（大月書店）をきっかけに、買い物難民の問題が話題になりました。経済産業省『地域生活インフラを支える流通のあり方研究会 報告書』では、買い物難民は全国で推計600万人とも報告されています。その現状は、高齢者や障害者が近隣のスーパーの倒産・撤退や商店街の衰退・消滅によって、食料や日用品の購入にすら支障をきたす事態に陥っている等です。

総合社会福祉研究所では今回の特集企画を具体化するために、「買い物難民問題」研究会を立ち上げ、「買い物難民問題とは何か」の基調報告を受け、参加者からの事例報告で内容を深め合ってきました。今号ではこの研究会での議論を踏まえ、買い物難民を支援する福井県民生協や東京巣鴨地蔵通り商店街の現地取材を行い、生活保障の視点から買い物難民の問題を考えることにしました。

新井康友（買い物難民問題研究会代表／中部学院大学）

買い物物は文化コミュニケーション

素顔の商店街・巣鴨地蔵通り

取材・田中 彰
大阪福祉事業財団
盲養護老人ホーム 槻ノ木荘総主任

あたかも「東京中のお年寄りが集まって来てんのとちやうか!？」と思うほどの賑わいを見せる「おばあちゃん原宿」こと、東京豊島区巣鴨の巣鴨地蔵通り商店街(巣鴨・庚申塚商店街)。ある秋の四のつく縁日の日に取材に訪れました。

お地蔵さんがあるから

巣鴨地蔵通り商店街は、旧中山道に沿って南北に伸びる八〇〇mほどの通りで、庚申塚あたりの街道の客引きの様子が江戸名所図絵にも描かれた歴史あるところで、商店街加盟の店は現在約一九〇店舗。毎月四のつく日は縁日で、商店街の幅八mの道路にさらに屋台がひしめき合います。まあその

人通りの多いこと! 正月初詣の人気神社の境内、とたとえてもけっして誇張ではないでしょう。毎回四〇五万人もの人たちが来られるとのこと。そして道行く人のほとんどが高齢者!(プラスそのお友達、つまり同じ高齢者かその娘さん。嗚呼! 夫らしき男性高齢者の少ないこと!)。お年寄りを中心に、どうしてこれほど人々を引きつけるのか、とげぬき地蔵尊境内の休



縁日の人通り

憩スペースでくつろぐ参詣者や、買い物客のみなさんに声をかけてみました。

この商店街の魅力について単刀直入にお聞きすると、多くの方が開口一番「お地蔵さんがあるから」と答えられます。地蔵尊の「自分の身体の悪い部分」をお身拭いす